

猟友会の会員について



鈴木 一彦 議員

質問 今後の有害鳥獣駆除を考えると猟友会の会員不足が心配される。町として積極的に加入促進を図るべきでは。

答弁 熊や猿、カラスの有害駆除を猟友会にお願いしており、心から感謝している。

今年度から「鳥獣被害対策実施隊」を組織し、5月から10月までの半年間、毎週2回定期的に巡回し追い上げや捕獲を行い、これまで83頭の捕獲実績があり、今年度の農作物の被害面積や被害金

額は前年より減少し、成果を得ている。

猟友会の会員数は八森支部が6名、峰浜支部16名、八森支部は昨年1名、峰浜支部では今年に入って1名加入している。

町では平成24年度予算から「有害鳥獣捕獲従事者育成支援補助金」制度を設け、会員を増やすために努めてきた。

今後は、更に猟友会員が増えるように補助制度など広報に掲載し、PRに努めると共に、八森・峰浜両支部と相談しながら進めたい。

又、猟友会の皆様には、有害鳥獣駆除活動のみならず、山の遭難救援活動においても中核的な役割を果たしていただいております。町にとっても会員確保は重要な課題であると認識しており、出来る限りの支援をしたい。

土づくりによる支援を



質問 農産物の生産は土づくりが基本だが、化学肥料に頼る農業になり、その結果、地力低下が懸念されている。土づくりのために堆肥投入をしたり、土壌改良剤を散布した場合、町で支援できないか。

答弁 町単独での支援は財政的にかなり難しいが、国、県、町が共同で支援する「環境保全型農業直接支払制度」を活用出来ないか検討したい。

産業振興会議について

質問 今年1月に産業振興会議が発足したが、今後会議を通して、町の産業振興にどう生かし取り組んでいくのか。

答弁 官民ネットワークを構築しながら、雇用の場の拡充と就業を促進することを目的に、11の関係団体に呼びかけて発足した。初回は、各団体の課題や取り組み等を知る良い機会となったが、事業者の声を施策に反映させるとともに、異業種間の連携や、新規事業の可能性について議論できるように進めていく。

今後は実務担当者の会議を多く持ち、町の産業振興に関わるアイデアやヒントを探っていく。

生薬栽培について



水木 壽保 議員

質問 今年から生薬品目を絞り込んで農家が本格的に取り組むようになり、2品目に助成金を交付して農家を支援し、生薬を活用した町づくりを目指すことになっていく。

平成31年までの年次栽培計画では12品目を栽培するようだが栽培面積はどの程度か。

専門栽培指導者がいないこと、除草剤を使うことができず手作業が多いなど、生薬は課題が多い。

町と社団法人東京生薬協会との栽培促進に関する連携協定書の期限が3月末で切れるが、期間延長は何年か。

町には生薬試験栽培圃は他のどこにもないような立派な試験圃がある。栽培農家の定着に向けてどこまで力を入れていくのか。

答弁 12品目のうち26年度までの試験栽培の結果、生育不良のものを除き、27年度の試験栽培品目は6種類で、カミツレ、ウイキョウ、センキウ、キキョウ、カンゾウ、センブリの予定。

しかしカミツレとキキョウは栽培希望者が増えた場合、苗に限りがあるため試験栽培面積が減少する。

農家の栽培面積について

では、龍角散から購入希望のあるカミツレは約30アール、キキョウは反当収入にもよるが、5、6ヘクタールになると試算している。ほかの品目については、購入してくれる会社、数量が決まらないと試算できない状況である。

東京生薬協会との「生薬の栽培の促進に関する連携協定書」の協定期間は平成27年3月31日となっている。

町の試験栽培は平成25年度から2年経過したところだが、各品目の栽培技術や収穫、乾燥調製方法など、まだ指導、助言が必要なことから、現在3年程度協定期間を延長する方向で協議をすすめている。

再質問 タラの芽・ウド・サシトリも生薬の仲間である。



昨年6月に行われたカミツレ収穫体験より生薬を活用した町づくりの実現に向けて

間である。町では春になると山菜など生薬を食している。他県ではシルバード世代が地域のために元気づけようと栽培しているか。町でも計画をしてみたらどうか。

答弁 自生している薬草があるのは確かだが、これを薬にするには質が均等でなければならず、種類もある程度まんべんなく確保されていない。売り込むまではないか。